

ねぎの需給動向

調査情報部



ねぎ (栃木産)

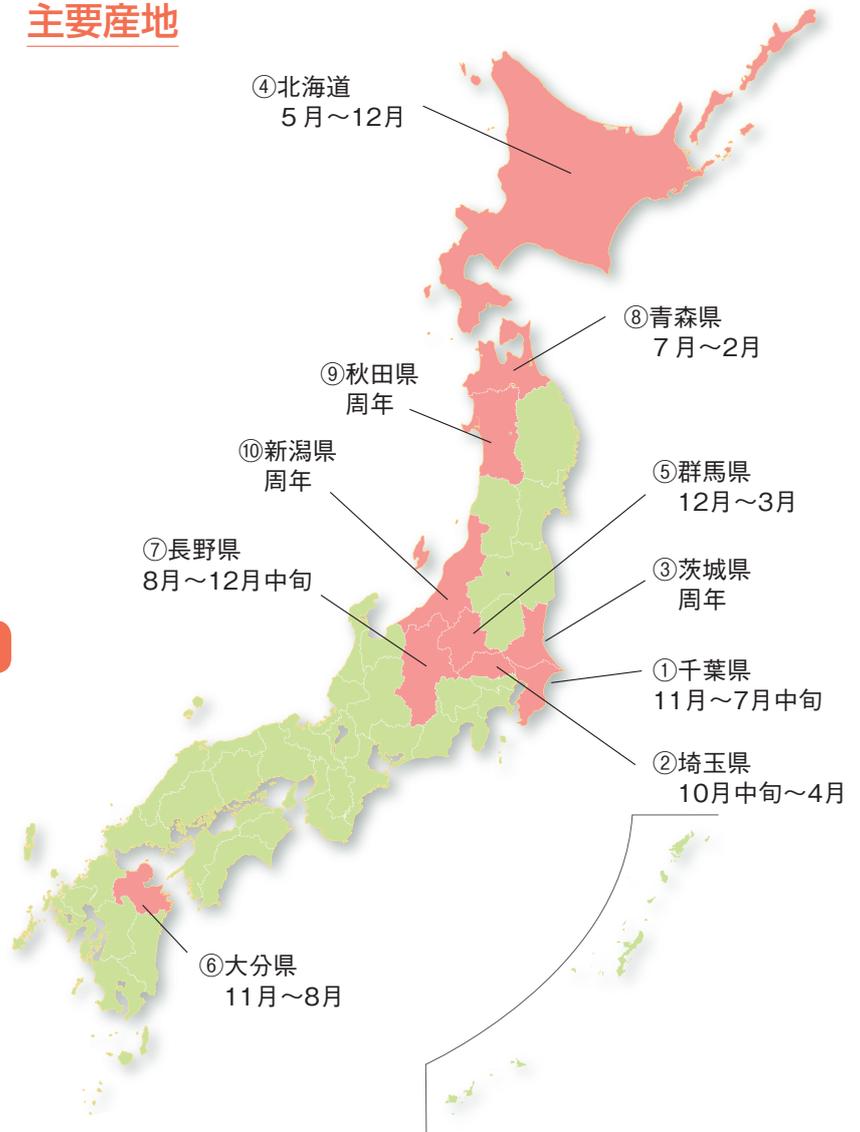


葉ねぎ (山形産)

東洋の野菜として知られるねぎの原産地は中国西部またはシベリアとされている。日本への渡来は8世紀ころで平安時代には食用として栽培されていたという記録が残っている。

ねぎの品種は、その形態的、生態的特徴から、土寄せをして葉鞘部を利用する「白ねぎ

主要産地



資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

(根深ねぎ)」の千住群と加賀群、緑色の葉の部分を利用する「青ねぎ (葉ねぎ)」の九条群に分けられる。食用としての歴史の長さから、特色ある地方品種が残っており東北・北陸地方の「曲がりねぎ」、山形県や茨城県の「赤ねぎ」、愛知県の「越津ねぎ」、群馬県の「下仁田ねぎ」などが知られる。

作付面積・出荷量・単収の推移

平成28年の作付面積は、2万2600ヘクタール（前年比99.1%）と、前年よりわずかに減少した。

上位5県では、

- ・埼玉県 2440ヘクタール（同100.4%）
- ・千葉県 2300ヘクタール（同 98.7%）
- ・茨城県 1900ヘクタール（同100.0%）
- ・群馬県 1060ヘクタール（同 98.1%）
- ・大分県 888ヘクタール（同 99.4%）

となっている。

28年の出荷量は、37万5600トン（前年比98.0%）と、前年よりわずかに減少した。

上位5道県では、

- ・千葉県 5万7200トン（同 96.9%）
- ・埼玉県 4万8600トン（同 99.0%）
- ・茨城県 4万1700トン（同102.2%）
- ・北海道 2万 300トン（同 91.0%）
- ・群馬県 1万5100トン（同 96.2%）

となっている。

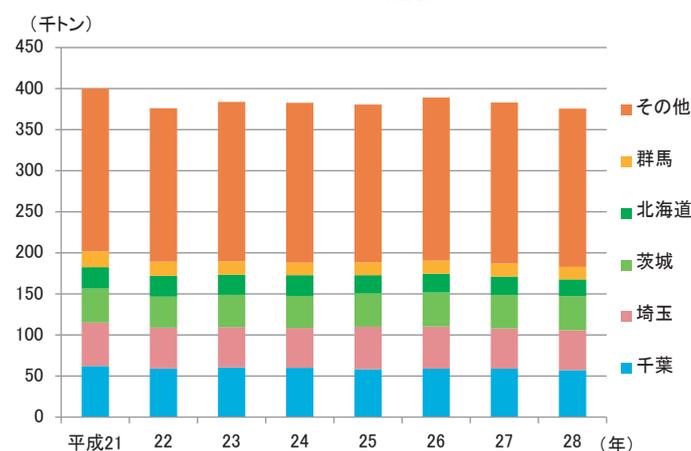
出荷量上位5道県について、10アール当たりの収量を見ると、北海道の3.01トンが最も多く、次いで千葉県の2.83トン、茨城県の2.56トンと続いている。その他の府県で多いのは、大阪府の2.51トン、青森県の2.42トンであり、全国平均は2.06トンとなっている。

作付面積の推移



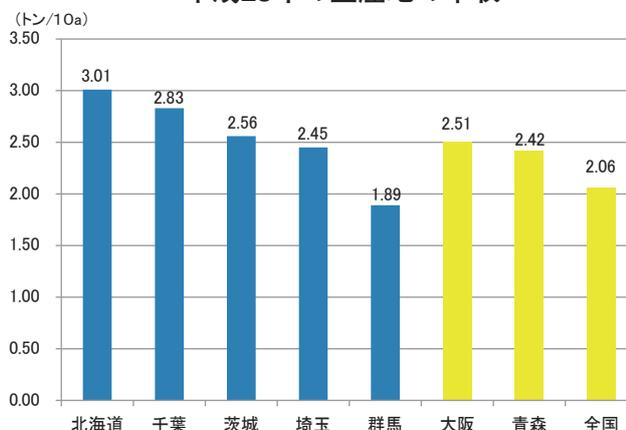
資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

出荷量の推移



資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

平成28年の主産地の単収



資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

注：黄色は、出荷量上位5道県以外で単収が多い2府県および全国平均。

作付けされている主な品種等

白ねぎは関東、青ねぎは関西で多く利用されていたが、現在では両方とも全国的に利用されるようになり、白ねぎと青ねぎの中間品種やあさつき、わけぎ、リーキなどねぎの種類は500種以上ある。

核家族化やゴミを削減したいといったニーズから小型のものや、緑部分と軟白部分が両方とも利用できる食味のもの、鍋専用のものなど特色ある品種も出てきている。

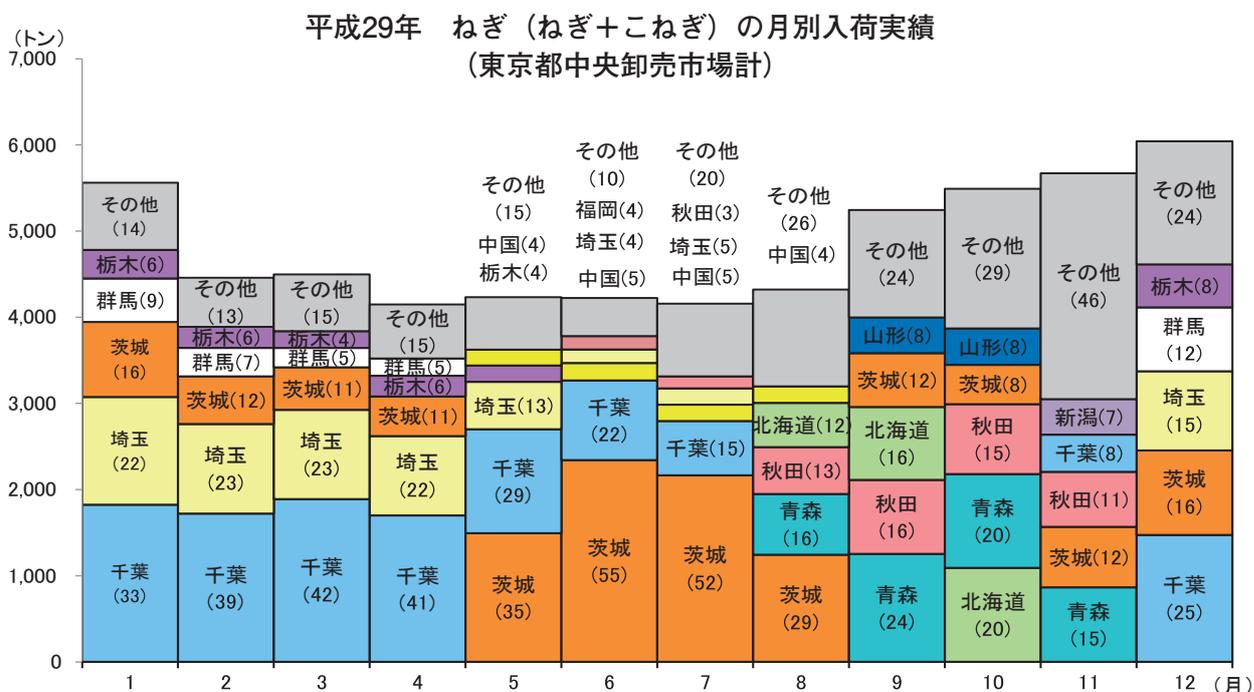
都道府県名	主な品種
千葉県	夏扇、春扇、龍ひかり
埼玉県	龍ひかり、龍翔、龍まさり
茨城県	春扇、夏扇、関羽
北海道	北の匠、白羽一本太、北洋一本、関羽一本太
群馬県	冬扇、夏扇、下仁田

資料：農畜産業振興機構の関係者聞き取りによる。

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（平成29年）を見ると、年間を通して茨城県から入荷があるほか、入荷が多い11月から4月にかけては千葉県、埼玉県、群馬県、栃木県

など近在の産地が増え、8月以降は青森県、秋田県、北海道、山形県、新潟県など東北や北陸の産地へと移行する。

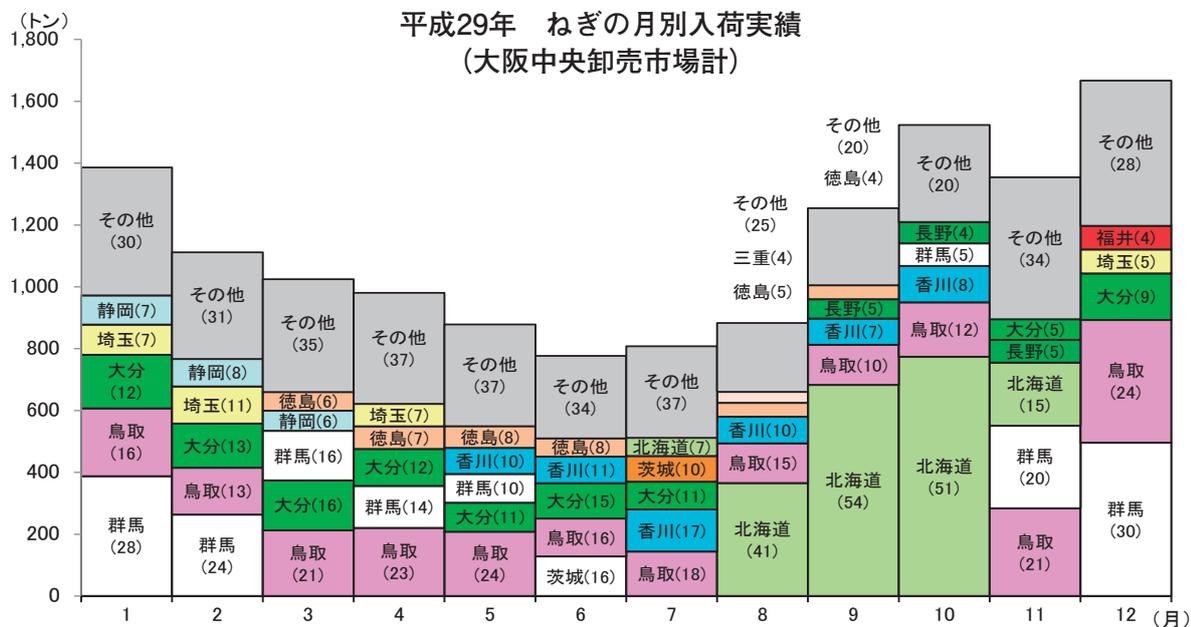


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成29年東京都中央卸売市場年報）

注1：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（平成29年）を見ると、9月以降、年明けまで徐々に入荷が増え、春先から夏場にかけては入荷が減少する。鳥取県からは通年で入荷が見られるほか、ピークとなる12月を含む冬場か

ら6月まで大分県、徳島県、香川県などの近在産地および埼玉県、静岡県、群馬県などの東日本からの入荷が増え、8月から10月は北海道産の割合が高まる。

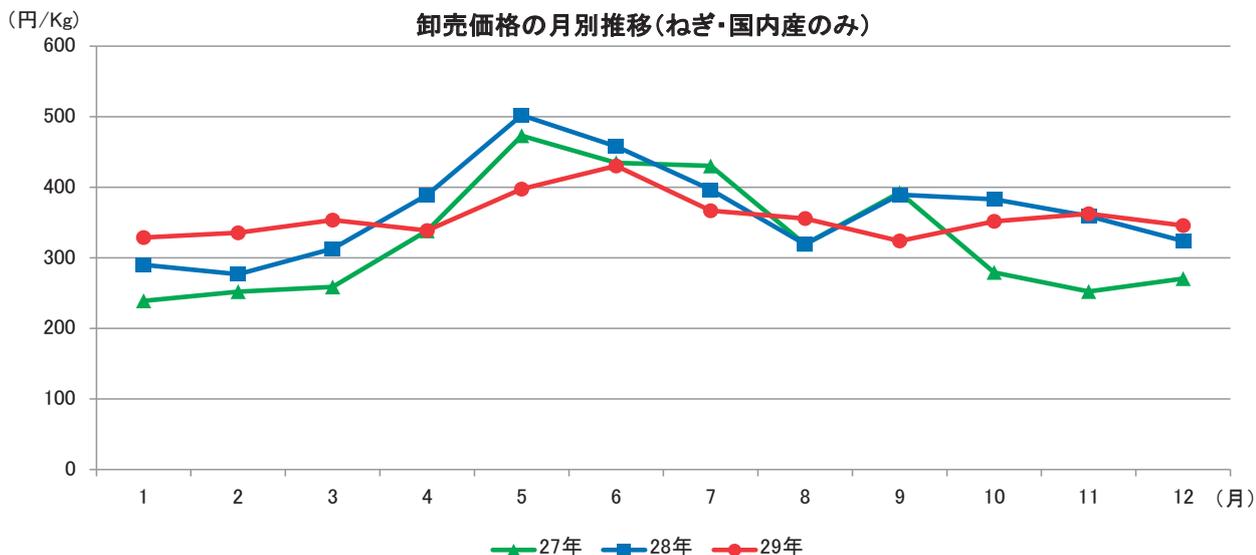


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成29年大阪市・大阪府中央卸売市場年報）
注1：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

東京都中央卸売市場における価格の推移

東京都中央卸売市場における国内産ねぎの価格（平成29年）は、1キログラム当たり324~430円（年平均355円）の幅で推移し

ている。国内産の価格は、入荷が減少する5月~7月にかけて高くなり、冬場はやや下がる傾向が見られる。



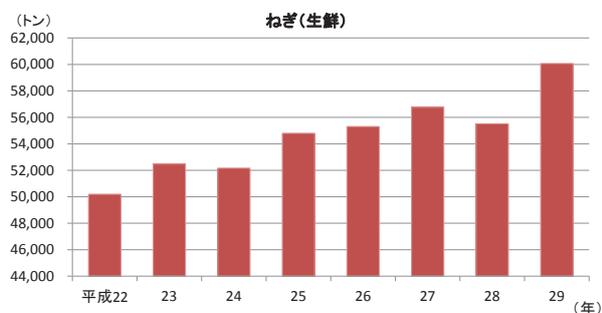
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

輸入量の推移

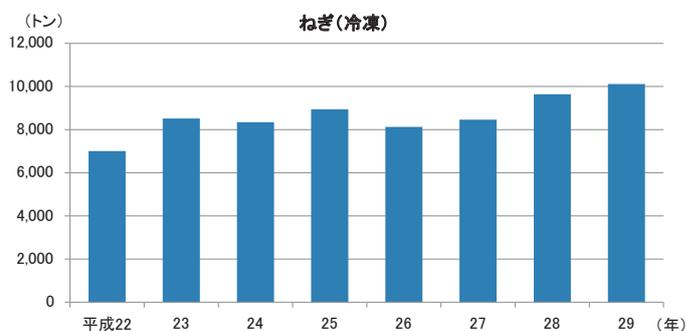
輸入量は、生鮮ねぎは5万～6万トン、冷凍ねぎは8千～1万トンの間で安定的に推移

しており、輸入先国としては、ほぼ中国のみとなっている。

ねぎの輸入量の推移

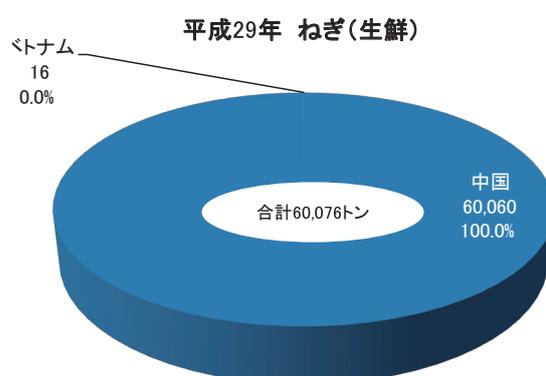
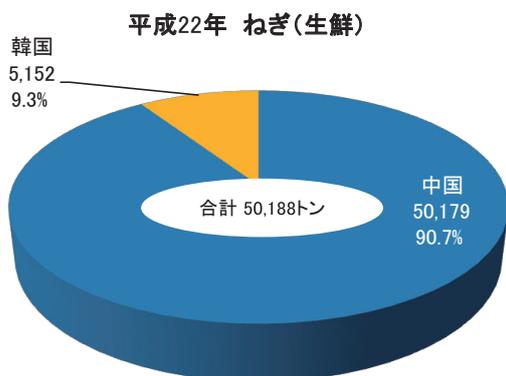


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」
(原資料：財務省「貿易統計」)

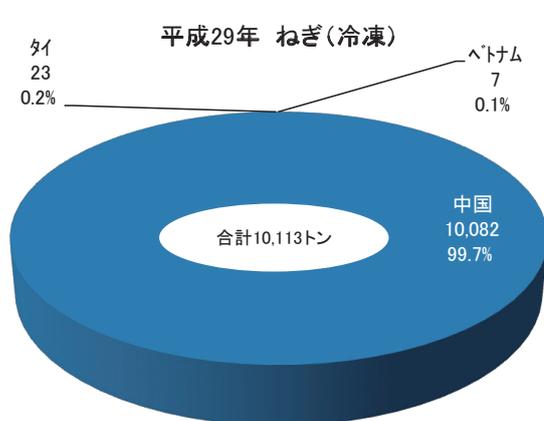
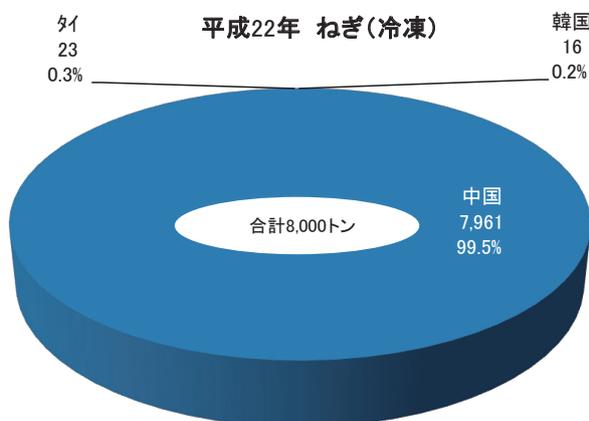


資料：農林水産省「植物防疫統計」
注：検査数量の数値である。

国別輸入量



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」 (原資料：財務省「貿易統計」)

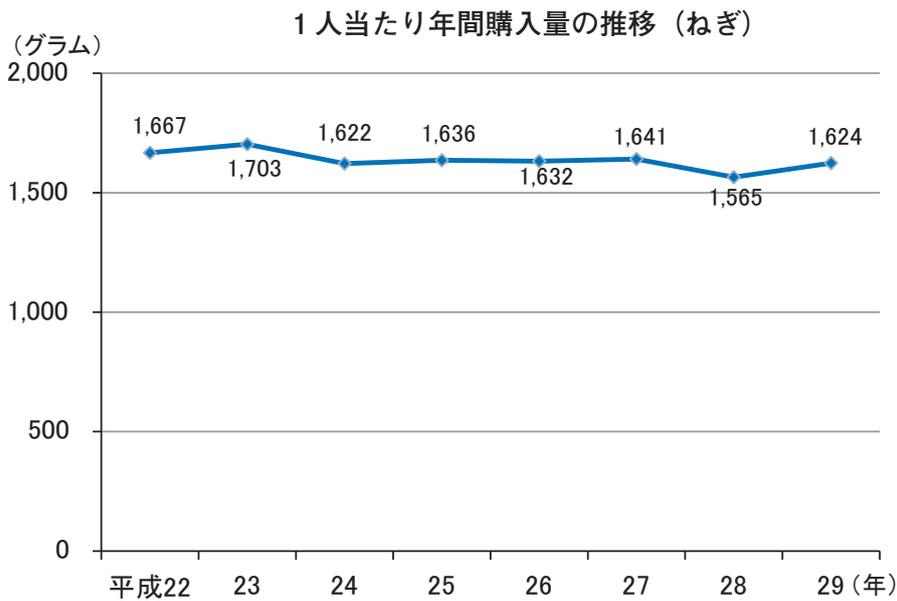


資料：農林水産省「植物防疫統計」
注：検査数量の数値である。

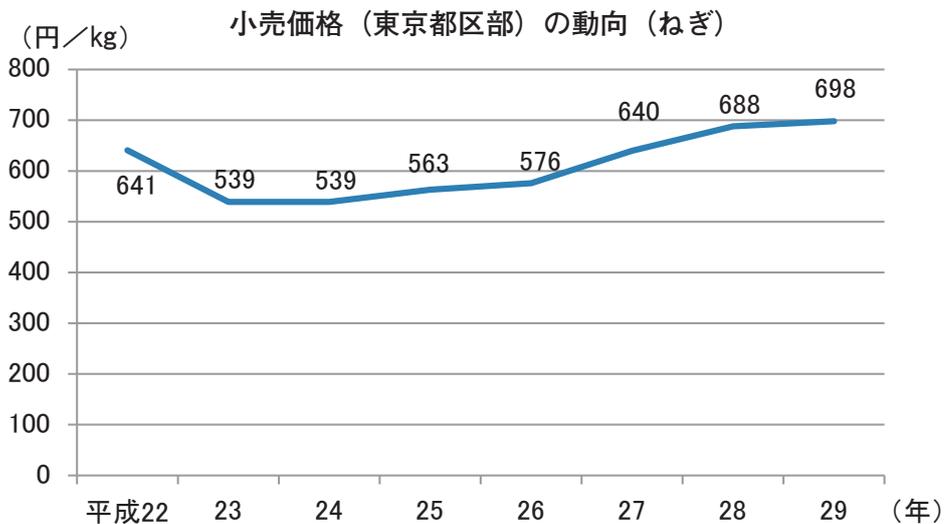
ねぎの消費動向

ねぎは、夏は薬味で冬は鍋物商材として、年間を通してさまざまな料理に欠かせない野菜です。独特のにおいのもとである硫化アリルは交感神経を刺激して体温を上昇させることから、風邪を予防するほか、ビタミンB1の吸収を高め、胃腸の働きを整えるなどの作用が知られている。

1人当たりの年間購入量は、年間1.6キログラム前後で安定して推移している。ねぎは比較的、栽培期間が長い作物であることから長雨、気温上昇、干ばつなど、最近の天候不順により生育不良や収穫作業の遅れなどの影響を受けやすく、不安定な入荷となる時期が多かったことから小売価格は上昇傾向である。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「家計調査年報」）



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：総務省「小売物価統計調査」）